

Neelakantan, S., Ramanujam, S. and Seshadri, T.R. 1959. Chemical investigation of Indian lichens. Part XXII. J. Sci. Ind. Res. (India) 18B: 111-113. Hawksworth, D.L. 1969 a. A new variety of *Alectoria virens* Tayl. from Yunnan Province, China. Misc. Bryol. Lichen. 5: 1-3. — 1969 b. The lichen flora of Derbyshire. Lichenologist 4: 105-193. — 1970. The chemical constituents of *Haematomma ventosum* (L.) Massal. in the British Isles. Lichenologist 4: 248-255. Howe, R.H. 1911. American species of *Alectoria* occurring north of the fifteenth parallel. Mycologia 3: 106-150. Laundon, J.R. 1970. Lichens new to the British flora: 4. Lichenologist 4: 297-308. Maass, W.S.G. and Neish, A.C. 1967. Lichen substances II. Biosynthesis of calycin and pulvinic dilactone by the lichen, *Pseudocyphellaria crocata*. Can. J. Bot. 45: 59-72. Mosbach, K. 1964. On the biosynthesis of lichen substances. Part 2. The pulvic acid derivative vulpinic acid. Biochem. Biophys. Res. Commun. 17: 363-367. Motyka, J. 1958. Odkrycie *Alectoria tortuosa* Merrill w Karpatach Wschodnich. Fragm. Florist. Geobot. 3: 201-203. — 1964. The North American species of *Alectoria*. Bryologist 67: 1-44.

* * * *

モエギイバラキノリ (*Alectoria virens*) は *Sulcata* 亜属に属し、形態的にも化学的にもかなりの変異を示す。これらの変異を検討した結果、地衣体が垂れ下り主な分枝の断面が円形で、直径 1.5 (-2.0) mm までのものを var. *virens* とし、地衣体が多少基物上に平臥し、主な分枝に亀裂があって扁平となり、巾 3-5 mm に達するものを var. *forrestii* とした。また、var. *virens* にはプルピニン酸の含量が少なく、地衣体の大部分あるいは全体にわたって灰褐色になるものがあり、これを f. *decolorans* として区別した。モエギイバラキノリはいわゆるヒマラヤ要素の一つと考えられるが、台湾にも分布している。化学的にはプルピニン酸のほかにはビレンス酸 (*virensic acid*) を含むものがあり、ビレンス酸を含まないものと同様に、分布の全域にひろがっている。また、プルピニン酸を含むもの 2 点も見つかった。

○ *Lepidium sativum* の和名らしく用いられた “Serderie” について (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: The word used as the Japanese name for *Lepidium sativum* L.

ゆえあって *Lepidium sativum* についてしらべてみた。この草本は現在なお残存しているかどうか、寡聞にしてよく知らないが、江戸末期のころから明治の初期にかけ

て香辛料として栽培されたことがあったらしい。この利用はその頃欧米から東南アジアにまで及んだことはド・カンドルの栽培植物の起源や Basu の印度薬用植物誌 (1918) にこれが栽培されたことが書いてあるのでわかる。そうして、欧州人の航程が日本にのびるにつれ、この草も彼等によって伝えられたと考えられる。しかし、この利用がすたれるにつれ、その栽培もまたすたれ、いまでは見られなくなっただけではない。それはそれとして、この植物の和名として用いられたものについては、いささか、がってんのいかなことがある。和名としては、コショウソウとセルデリーとの名があるが、コショウソウは Pepper grass に源を發したとすればよいこととしてもセルデリーにいたってはわからない。そこで、いちどは、だれでもやるように、植物名彙や植物名鑑や植物総覧の各版を 逐次見て行くとともに 帝国大学理科大学植物標品目録 (1886) なども併せて見ていくと、コセウソウとならんでセルデリーまたは、それに近似の名称が目につくけれども、このセルデリーについてはさっぱり見当がつかない。いづれ外来語かその転化であろうと思ひ、上記文献を見ていったらそのなかで、上記標品目録に横須賀 Cult (P. 16) とあるので、あるいは Fr. Sav. となにか関係でもあるのかと考へ一応しらべたら、同書日本名索引に日本名として Seruderei (SM) が出てきた、SM は草木図説だと断つてあるので、草木図説 (1814) を見るとたしかにセルデレーの名があり、かつ「此種モト舶来ニシテ普ネクセルデレーノ名ヲ伝フ」とある。こゝに「伝フ」とある以上草木図説以前から伝わったものらしいので、さがして見たら本草図譜 (1844) 第十二巻に図説されサルテレンとしてあるので更にさかのぼって見ようと白井先生の植物渡來考を見たら後藤光生の紅毛談が引用してあった。この本は明和 2 年 (1765) 上梓の珍本であったので国会図書館本を拝見し、かつ復写をしていただいたら、たしかに、「せるでりい」とあるので、これが印刷された古い名らしく、本草図譜も、草木図説もここいらに糸をひくものと思われる。さて、來歴の詮索はそれとして、セルデリーの意味はどうであろうか、また Fr. Sav. が日本名だとして草木図説にかいてないのに、どうして日本名索引に拾い上げたか？そこで参考になるのは東大にあるサパチエ氏の手記のある、1866-71 の間に採集した標本の名箋上に日本人の筆蹟でセルレターとかいてあることで、多分日本人の訳者が書いたものであろうが、それがそのままローマ字で Seruderi となってフラサバ目録に取入れられ、更にこの目録が参考となった名彙、名鑑、総覧に影響し、一犬嘘を報じて万犬が害を伝えたものと思われたが Seruderie は蘭語の Selderie の l が r に書きちがえられたため起こったものと思う。草木図説には蘭語が用いられている事実が多く、同書のこの植物のところにも Tuinkers だの Peper kruid だのが出てくるから Selderie が用いられたとしても当然なことであるまいか。これもわれわれがよく不用意でやる l と r のとりちがえであったらしい。

ついでながら草木図説のこの項の終りの Tuinkers は英語の Cress に、Peper

kruid は Pepper herb や Pepper grass にあたるようである。しかし Selderie が果して *Lepidium sativum* の蘭名であるかどうかは別の話題としたい。

なお念のためつけ加えておくと、この植物は Fr. Sav. 目録の本文中には無く、ただ第 2 巻の巻尾 (p. 712) に日本語の植物名としてあげてあるだけである。したがって、同書の日本名索引なるものは日本名の表だけである。

要するに江戸末期にオランダ人からのきき覚えが、かなで「セルデリイ」とかかれ(紅毛談)、サルテレン(本草図譜)更にローマ字で Seruderei (Fr. Sav. 目録)となり、またこれが後の名彙や名鑑に及んだものである。そんなわけで其後の賢明な人たちは、こんな名は捨ててしまった。たとえば、大井氏の日本植物誌。

For *Lepidium sativum* L. an anonymous word “serderie” is used in Enumeratio Plantarum in Japonia sponte crescentium (II, p. 712) by A Franchet & Lud. Savatier but this is misspelling of dutch noun “selderie”.

(東邦大学薬学部)

O *Drosera arcturi* Hook. の染色体数 (近藤勝彦・B・ホワイトヘッド)
Katsuhiko KONDO & B. WHITEHEAD: Chromosome number of *Drosera arcturi* Hook.

オーストラリア、ニュー・サウス・ウェルズ州の比較的標高の高い地域に存在する湿地帯に *Drosera arcturi* Hook. の自生がみられる。この種の染色体数報告は今までに無かったので、ここに新しく発表しておく。材料は下記の自生地より採集した。30 miles west of Jindabyne N.S.W. at an altitude of 7000 ft. on the side of a mountain. A swampy area where water was seeping from the hillside, which would have been water from snow melting higher up. Plants growing in dense clumps. (coll. January 18, 1971. Whitehead 3001).

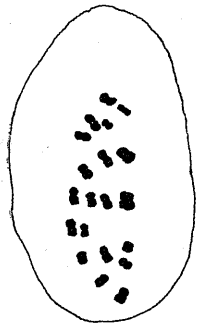


Fig. 1. Somatic chromosomes (\times ca. 1450) in root tip cells of *Drosera arcturi* Hook. ($2n=20$).

根端細胞は、前処理をせず、直接カルノア液で固定した。観察は酢酸カーミンおしつぶし法により行ない、 $2n=20$ が観察された。Diels (1906: Das Pflanzenreich 4 (112): 1-136)によれば、*D. arcturi* は他の 2 種、*D. uniflora* Willd. (南アメリカ産) と *D. stenopetala* Hook. f. (ニュージーランド産) とともに Subgenus I. *Rorella* DC., Sect. I. *Psychophila* Planch. に入られている。おもしろいことに、*D. arcturi* の染色体数 $2n=20$ は、同じ属属中の Sect. VII *Rossolis* に含まれる種と基本数 $X=10$ をもつことで共通している。

(ノースカロライナ大学・パークレー高等学校)